

# 中国出土資料学会会報

2020年12月12日 第71号

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 小寺研究室内 中国出土資料学会（事務局）

Tel : 03-5841-5843 e-mail : office@shutsudo.jp

<http://www.shutsudo.jp/>

## 新型コロナウイルス流行下における学会運営について

宮本 徹（中国出土資料学会会長）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）がはじめて検出されたとされる2019年12月から、まもなく一年になろうとしています。日本では年が明けた20年2月頃から社会全体に急速に危機感が広まり、私が高津純也・前会長（現副会長）からバトンを引き継いだ4月には、これまでと同じような社会生活を営むことはすでに困難な状況となっていました。

本日はこの紙面を借りまして、会員の皆さんに対してこれまでの学会としての対応を時系列に沿ってご報告するとともに、これからも比較的長期間続くであろう目下の状況に対するご協力を希うものです。

本学会の事務局は、本年3月まで長年に亘って東京大学文学部中国語中国文学研究室に置かれ、大西克也理事が庶務委員長として歴代の事務局幹事とともに学会の実務を担ってこられました。そして4月からは小寺敦理事が新たに庶務委員長に就任され、柏倉優一幹事との新事務局体制（所在地：東京大学東洋文化研究所）が発足しようとした矢先に、本会の活動も大きくコロナ禍の影響を受ける事態となりました。即ち、事務局の引継ぎが未だ完了する前に東大への入構が厳しくされたことに伴い、事務局機能は事実上停止を余儀なくされたのです。

このような状況を受けて、4月13日には通信による理事会を開催し、(1)7月4日開催予定の今年度第1回大会を延期すること、(2)開催時期については、中止等の可能性も含め後日改めて検討することとするの二点を、審議・決定しました。本学会の活動の柱の一つである大会の延期を決定することはまさしく断腸の思いであり、発表予定者の3先生をはじめ、開催校代表の小澤正人理事並びに関係各位に多大なご迷惑をおかけしました。ただ、事務局体制が未だ整わない中で開催準備を進めることはきわめて困難であり、また当時各大学において閉鎖等の措置が厳格に実施されていたことも考えれば、それもやむを得ないことであつたと思う一方で、やはり今以て残念な気持ちを拭い去ることができません。

その後、状況の推移を注意深く見守って参りましたが、にわかには状況が好転する見込みがないことから、続いて7月5日に通信による理事会を開催し、(1)今年度第1回大会を中止するとともに、

第2回大会（12月）をオンラインでの開催を軸に準備すること、（2）COVID-19が終息するまでの間、事務局からの郵便等による物品の送付を停止すること、（3）会誌への投稿はすべて電子メールによることとし、郵送による投稿を停止すること、（4）目下の財政状況も勘案し、会報の送付は今後恒久的に停止し、これを学会ホームページに掲載すること等について、審議・決定しました。その結果、これまでお送りしていた物品の一部がお手元に届かないこととなり、会員の皆さんにはたいへんなご不便をおかけしていることと思います。この点につきましては、深くお詫び申し上げますとともに、何とぞご理解賜りたくお願い申し上げます。なお、幸いにも会誌『中国出土資料研究』第24号については、下田誠機関誌委員長のご尽力により、他の一部物品とともに印刷所から直接皆様のお手元に届けることができたことを申し添えます。

その後、10月13日に再度通信による理事会を開催し、第2回大会を12月12日にオンラインで開催すること、第1回大会の発表予定者であった3先生にそのままご発表いただくことを決定いたしました。

以上が新型コロナウイルス流行下における、今日までの対応の概略です。ここに至るまでには関係各位からの多大なご協力を賜りました。この場を借りまして、厚くお礼申し上げます次第です。

今後の状況についてはまだまだ予断を許さないと思われませんが、与えられた条件の下、本学会に寄せられた期待に可能な限り応えるべく、務めを果たしていきたいと考えております。会員各位のご協力を切にお願いする次第です。

#### 【追記】

会員の皆さんへの情報提供は、今後しばらくの間、主として学会ホームページ（<http://www.shutsudo.jp>）を通して行うこととなりますので、折に触れてホームページをご確認ください。また、大会案内等の重要な情報については、メールでも発信いたします。この機会に学会事務局（[office@shutsudo.jp](mailto:office@shutsudo.jp)）にメールアドレスをご登録くださいますようお願いいたします。

## 《特別寄稿》

中国で開催されたオンラインシンポジウム参加についての備忘録

—「基于上古漢語語義知識庫的歷史語法与詞彙研究 第二次學術研討会暨先秦漢語語法研究工作坊」（2020年8月22日）参加報告記—

戸内 俊介（二松学舎大学文学部准教授）

2020年は新型コロナの影響で、人が密集する活動が制限されたため、多くの企業活動や大学の授業が余儀なく、対面形式から、zoom や Cisco webex などの web 会議システムを用いたリモート形式へと変更された。それにともない国内の多くの学会活動も制限され、延期や開催中止に追い込まれた。本学会においても、2020年7月4日に成城大学で開催予定であった第一回大会が同年12月に延期された。また一部の学会やシンポジウムの中には、早くからオンラインによるリモート形式での開催にこぎつけたものもあった。

IT分野で日本の先を行く中国では、日本よりも迅速に学会やシンポジウムをリモート形式に切り替えたようで、積極的な学術活動が web 会議の場で展開されている。

さて、筆者は2020年8月に中国・北京大学中文系で開催された「基于上古漢語語義知識庫的歷史語法与詞彙研究 第二次學術研討会暨先秦漢語語法研究工作坊」に招かれ、研究報告を行った。8月と言えば、新型コロナの第2波が拡大しつつあった時期であり、言うまでもなく、会議はリモート形式で行われた。今後、国外の学会やシンポジウムへリモート形式で参加する研究者が益々増えるであろうと予想されるが、このような現状に鑑み本文では、私が参加したリモート会議の様子を報告し、会員諸氏への情報提供としたい。2020年12月発行の会報で、8月のことを語るのは、情報の鮮度は落ちているものの、備忘録としてここに書き連ねるのも、無駄ではあるまい。

まず今回使用した web 会議システムは、テンセント社の「騰訊会議」というアプリケーションである。中国では広く用いられているオンライン会議システムであり、多くの学術会議で用いられているようであるが、日本ではほぼ無名と言って良い。

しかし、このシステムは日本国内では自由に使えない。というのも、中国の携帯電話番号を所持していなければ、アカウントを作ることができないからである。そのため、中国国外で使う人向けの「国際版騰訊会議 voov meeting」というアプリケーションが別に用意されており、筆者はこれを利用した。「国際版」と銘打っているように、登録に際し中国の電話番号は不要である。なお、wechat（微信）のアカウントと紐づいており、それを持っていれば、容易にアカウントの登録をすることができる。アプリケーションの使い方は zoom や Cisco webex などの会議システムとほぼ同じである。また騰訊会議と voov meeting は基本的には同じシステムのアプリケーションであるため、互いに問題なく接続できる（筆者は念のため、北京大学の担当者をお願いして、接続テストをしてもらったが、互いに難なく接続することができた）。なお、インストールは自己責任でお願いしたい。

今回の学術会議の参加者は基本的に北京大学中文系の関係者であったが、会議の様子はオンライン上でリアルタイムで放送され、世界中の誰でも見られるようになっていた（今回は「騰訊会議直播」、及び「Bilibili 直播」で公開。Bilibili は日本のニコニコ動画のようなサイト）。これは従来の

学会やシンポジウムには見られなかった特徴である。日本にいる私の友人や知人が見ていたし、900人以上がリアルタイム放送に接続していたと仄聞している。

さて、筆者が会議当日までにしたことは、無論、発表準備であるが、すべてが初めての経験であるため、慎重を期して、当日発表する内容の論文を書き、北京大学の担当者に送り、それを会議参加予定者に転送してもらった。筆者はその上で、パワーポイントも作成し、当日はパワーポイントも併用した。

今回の学術会議の報告者は筆者を含め3人であったが、3人ともパワーポイントでの報告であった。パワーポイントのようなプレゼンテーションソフトはweb会議では必須である。

会議当日は、私は開始10分前に騰訊会議にログインしたが、その時間にはまだログインしていない参加者も多く、開始時間間際にログインした参加者が少なくなかった。参加者は北京在住者のみならず、他地区の者もいた。自分の家や大学から参加しているものと推測される。そして参加者があらかた揃うと最初は各位による「挨拶合戦」がはじまり、それが終わるとようやく会議が始まった。

私はトップバッターとして報告を行った。実際にやってみて気が付いたのは、自分が話しているときに、問題が生じてないかどうかを全く確認できないということである。事実、話し始めは音声ハウリングを起こしていたと、日本でリアルタイム放送を見ていた友人から、連絡を受けた。

Web会議アプリにはチャット機能も備わっているが、自分が発表している時にはなかなかそこに注意を払うことができない。

対面形式では、発表者は参加者の注目を浴びるため、あがり症の筆者などは、かなりのプレッシャーを感じるが、リモート形式ではその心配がない。これは筆者にとって予想外に良かった点である。

質疑応答の場では、司会者の仕切りが良かったため、各人が無秩序に発言するといったことはなく、問題は感じなかった。司会者の重要性が再認識される。また会議アプリのチャット機能も十分活用されており、そこで、意見や質問が出されることもあった。中国語の非母語話者である筆者にとっては、口頭で言われるよりも、理解がたやすく、ありがたい。また私の専門としている古代中国語文法の分野では、質疑応答の際、質問者から「こんな用例もある」と、中国古典の例文を提示されることもあるが、中国語で口頭で言われてもわからないことが多く、チャットはその困難を克服するツールとして、極めて有用である。

騰訊会議の音声はかなりクリアであり、質疑応答の場でも、大きな問題を感じなかったが、一部の参加者は、パソコンやマイク、またそれを用いている部屋の問題からか、音声がくぐもって聞こえた。

そしてリモート会議の最大の問題は、参加者個々人のネットワーク環境である。発表者のうち1人は、ネットワーク環境があまり良好ではなかったようで、発表中、しばしば画面や音声が進まじり、なかなかスムーズな意思疎通ができなかった。しかも発表者本人が、トラブルに気が付かないこともある。こればかりは、対面形式には及ばない。

中国の一般的な学術会議であれば、会議の前後に記念撮影があり、会議後に会食があるが、リモート形式では無論、それもない。終わり方は会議からログアウトするボタンをクリックするだけであり、極めてあっさりしている。

なお、上記の「基于上古漢語語義知識庫的歷史語法与詞彙研究 第二次學術研討会暨先秦漢語語法研究工作坊」の発表概要は、「語言学微刊」 ([https://www.sohu.com/a/418015394\\_488532](https://www.sohu.com/a/418015394_488532)) という web サイトに挙げられている。ご興味のある方はそちらも参照されたい。

中国では今やリモート形式の学術会議が一般化しつつある。コロナ以前は、シンポジウムや講演会が開かれることを事前にも知っていても、日本にはその内容を聞くことがほとんど叶わなかった。ところが、リモート形式では、機器さえ持っていればいつでもどこでも発表内容を聞くことが可能であり、海外の学術会議参加に要する距離、時間、金銭面のハードルはほぼゼロに近くなった。学問的見聞を広めたいと願う者にとっては、決して悪くない環境である。

とは言うものの、海外で行われる学術会議であれば、やはり現地に行きたい、というのが筆者の極めて個人的な感想である。街を歩き、当地の空気に触れ、現地の飲食文化を体験する。これこそが、海外の学術会議に参加する醍醐味である（と筆者は思っている）。新型コロナのため、このような活動が当面できそうにないのは、極めて残念である。

## 《学会彙報》

○大会委員会より

(1) 7月4日(土)に成城大学で開催予定であった2020年度第1回大会(総74回)は、2020年12月12日(土)に延期されました。

○会報委員会より

(1) これまで会報(年2回発行)は国内会員等に対して郵送して参りましたが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により当面の発送作業が困難なこと、また中長期的に見て経費節減が求められること等の理由により、今年度からはこれを学会ホームページにおいて公開し、郵送は取りやめることといたします(2020年7月5日開催の2020年度第1回理事会における決定事項)。なお、発行回数や掲載内容等については特段の変更点はございません。会員の皆さまにはたいへんご不便をおかけいたしますが、何とぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

なお、会報発行の際にはこれをメールでお知らせするなど、引き続き広くお読みいただけるような工夫をして参りたいと思います。事務局にメールアドレスをご登録いただいていない会員の皆さまは、ぜひこの機会にご登録ください。

(2) 2012年7月21日に開催された臨時総会において、「中国出土資料學會著作権規定」が承認され、即日施行されました。本会報については第46号(2011年3月発行)から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることとなりますので、希望される方は、HP掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

(3) 年二回の大会開催時に合わせて発行される本『中国出土資料學會會報』は、新しい学術情報をできるだけ早く提供することを目的として編集されています。

会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報委員会に原稿の提供をお願い致します。中国における最新の学界動向、遺跡発掘の様相、学会参加記、新刊紹介など、広

く提供するに足ると感じられた情報であれば何でも結構です。

原稿は随時受け付けておりますので、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りください。会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

(1) 機関誌『中国出土資料研究』の投稿は紙媒体・郵送による方式を停止し、当面下記の通り行います。ふるってご寄稿願います。

- ・ご投稿の際は、メール(宛先: [office@shutsudo.jp](mailto:office@shutsudo.jp))で玉稿の電子データをお送り下さい。郵便で紙媒体等をお送りになっても受理いたしかねます。
- ・ファイル形式は、WORD(～.docx または、～.doc)形式です。外字は画像データ貼付でお願いいたします。
- ・文書のレイアウトは、WORD 横書きの標準的なものでお願いいたします。レイアウトを機関誌のそれに合わせないで下さい。
- ・図表が含まれるなど、WORD ファイルのみでは玉稿の正確な内容が反映されないのであれば、そのような PDF ファイルもお付け下さい。

(2) 『中国出土資料研究』第26号の締切について

2010年度大会(2011年7月16日開催)および2011年度大会(2012年3月10日開催)にて、『中国出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第24号の投稿締切日は、2020年12月末日です。ふるってご寄稿下さいませよう、お願い申し上げます。

(3) 『中国出土資料研究』の奥付について

機関誌では、その奥付記載発行日と実際の出版日との間のずれが大きいことに由来する問題が生じておりました。そこで、第20号からはその日付を一致させることになりました。最新第25号の奥付は2020年7月発行となっております。

○事務局より

(1) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、事務局では従来通りの作業が困難になっております。この状況に鑑み、大会案内等紙媒体の送付を当面停止し、学会ウェブサイトとメールでご連絡することといたしました。皆様には大変なご不便をお掛けして誠に恐縮ですが、どうぞお許しいただきますようお願い申し上げます。

(2) 年会費は、ゆうちょ銀行の以下の口座にご入金下さい。

口座番号：00180-5-13124 受取人：中国出土資料学会

なお会費は、  
通常会員・準会員 年額4000円  
学生会員・海外会員 年額2000円 　　です。

(3) 住所変更等が生じた場合は、メールにて下記アドレス宛にご連絡下さい。

[office@shutsudo.jp](mailto:office@shutsudo.jp)

(4) 2020年度より、会員名簿の発行は2年に1度、奇数年のみとしておりましたが、上記の方針により会員名簿の送付を当面停止いたします。